日本人大学生の英語コミュニケーションに対する態度・意識の変容
ー海外留学・滞在を経験することの意義と課題を中心にー

教科・領域教育専攻
国際教育コース　　指導教員　石坂広樹
宮脇勇気

序章　はじめに

これまで外国人と接する機会が多い環境にいる中で、周囲にいる日本人学生が英語話者に話しかけようとしないことが強く印象に残っている。本論文では、海外留学・滞在の経験の有無、英語力による英語のコミュニケーションに向けた思いの違いの他、留学に対してどのような思いをいだいているのかについて焦点を当てた。

海外留学・滞在の経験がどのように日本人学生の英語学習に影響を与えているのか、英語のコミュニケーションに向け、どのように困難を克服したのかを意識調査結果を中心にまとめた。

第1章　グローバル人材と英語教育

国際社会の発展に伴ってグローバル人材が注目されている。外国人人口が多国籍化・多様化し、大学教育もこの状況に対応する必要性が指摘される。また、外国語によるコミュニケーションが増加している。英語以外の言語に日本において対応可能な言語は少なく、英語の重要性を言及できる。また、学生の内でグローバル人材になりたいと思う人がいる一方、「自信がない」と答える学生が多いことを謳う調査もある。本論文が「グローバル人材」の育成に向けたさらなる取組の改善になると想定できる。

大学生の経験及び大学ごとの英語に対する捉え方、ビジョンが異なっている状況が英語における問題とも取れ、多岐にわたっている。留学を促進し、外国人と触れ合うことで日本人の英語を用いた英会話はどこまで改善されるのかと疑問を抱き、「意識の変容」に着目して研究を進めることにした。また、海外留学・滞在の経験によってあらゆる不安がどの程度解消されるのかと共に、留学が英語教育においてどのように位置づけられているのかを明らかにし、関連させながら調査を進めた。

第2章　本論の研究目的・手法・対象

海外留学・滞在による変化について調査・分析した先行研究を調べてみると、英語でコミュニケーションを取ることにおける不安は、海外留学・滞在の経験の形態等に基づいた使用へのもの、意識やふるまいの有り様、留学に対する学生の思いなどが関連していることが挙げられたことから、これまで注目されなかったリサーチクエッションについて5つ提唱した。

英語を学習・使用する機会は海外留学・滞在の経験が長ければ長いほど増えると考えられる中その実際についてが一つ、これまでの人生で培った英語力の差がどのくらい英語でのコミュニケーションにおける意識の変容に影響しているか検証するためのものが一つ、英語のコミュニケーションにつまずきを感じた際に本人がどのように乗り越えているかを調べるためのものが一つ、学生の持つ留学の必然性・必要性についてのものが一つ、そして最後に大学ごとの取り組みの違いによる影響についてが一つである。

まず、留学、英語を使用するときの不安、英

語学習に着目し幅広く文献検索を行った。その後、著者の所属するN大学において、すでに留学を経験している大学院学生へのインタビューを実施した。インタビューでは特に、留学への経緯、留学中の出来事・出会いなどについて訊いた。その後、3大学の大学生を対象にアンケート調査を行った。内容としては、教職履修生の割合、海外留学・滞在の経験の有無・時期・これまでの合計期間、英語力について、回答者の思う自分の英語について、英語でスムーズにコミュニケーションを取るために関する項目について調査を行った。

第3章　分析結果

インタビューにより、本論文と関係のある共通コードが8つ挙げられた。

英語学習に関するアンケートに参加した学生は235名である。海外留学・滞在の経験のある回答者グループとない回答者グループ、期間ごと、時期等で違いがあるのかを調査した。海外留学・滞在の経験を通して、英語のコミュニケーションが「できない」のではなく、「しなかった」だけであったことに気づいた人が増えた可能性が考えられた。海外留学・滞在の間に、初めての文化や振る舞いに触れた経験により、帰国後に英語学習に実用的なコミュニケーションを取り入れるようになった可能性が見られた。また、英語を使用する際の不安に関しては、平均値比較の結果、海外留学・滞在の経験の合計期間により特徴の違いが見られた。1か月を超えるか超えないか、1年を超えるか超えないかによって英語使用に対する不安の度合いに違いが確認された。英語のコミュニケーションの向上においては、回答者における「留学」の重要性にバラツキが見えた。自由回答の分析結果から、海外留学・滞在の経験の有無による留学が「絶対条件」だと思うかどうかに関してはそれほど大きな意識の差がないことがわかった。

第4章　本論文の総括

英語のコミュニケーションを行う際の海外留学・滞在の経験が及ぼす意識変容に様々な観点から着目し、大学生の思う留学の必要性について、大学間の取り組みの違いについて明らかにすることを目指した。リサーチクエッションに関しては以下のことがわかった。

海外留学・滞在の経験に着目すると、期間ごとに不安を小さくする可能性があることがわかった。

TOEICのスコアが高くなるに連れて英語仕様への不安が低くなっていることが確認できた。

英語のコミュニケーションの機会を様々に確保することで、困難を少しずつ乗り越える姿が垣間見られた。

海外留学・滞在の経験を持つ回答者のうち、留学に関しては、留学生の人口増加や教材発達、自身の経験から、絶対条件ではないとする回答が見受けられた。

グローバル教員の育成を謳うのであれば、何らかの対処・手立てを考える必要があろう。

終章　おわりに

今後、海外留学・滞在の経験の違いが英語使用への不安及び英語学習への抵抗感・負担感にいかに影響を及ぼすのかについて、他方、大学教育においても英語のコミュニケーションに支障を来す心理的な要因の軽減への手助けのあり方についても調べていく必要があろう。英語のコミュニケーションに苦手意識や不安等を感じている日本人大学生のための環境整備等が英語のコミュニケーションの機会の確保にも十分に効果的であるように思われる。